
Dウォーズ

unknown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dウォーズ

【Nコード】

N7647P

【作者名】

unknown

【あらすじ】

西暦2073年

この地球上から事実上石油が枯渇し、あらゆる物が機能しなくなつた。

西暦2099年

世界は石油に代わる未知のエネルギーを発見。これを『無限のエネルギー』と名付ける。

通称『インフィニティエナジーENG』。

これと同時に太陽系にて謎の星が突如出現した。

世界はこの星を『unk^{アンノウ}nown』と名付けた。

無人探査機による調査が開始されるが、どの探査機も消息を絶った。

西暦2232年

世界は大きく変わり、人々は自らに発現した『Dスキル』を使った戦争というスポーツにのめり込んでいた。

その名も『Dウォーズ』。

そんな世界に生きる綾瀬刹那^{あやせせつな}こと、俺と、愉快で変わった連中が繰り広げるハチャメチャな日常。

それがこの物語だ。

実妹に義妹、幼馴染、親友、悪友、先輩、後輩、生徒会長に擬人化少女、その他etcを巻き込んだ世界を綴ったこの物語を篤とご覧あれ！

00・西暦2232年の世界（前書き）

第二作品目です！

00・西暦2232年の世界

西暦2073年。

この地球上から事実上石油が枯渇し、あらゆる物が機能しなくなつた日。

地球から石油が消えたことによって、世界政府の——いや世界中の国家のお偉い方は今更になって現実をより重く見るようになった。

西暦2099年。

世界の半分を動かしていた石油が消えたことによって、様々な問題が起こつた。

人々は醜くも石油の為に犯罪に手を染め、奪い合い、暴動が発生したりもした。

交通手段の一つ、車が動かなくなり、都市機能の一部は麻痺をし、混沌の世界に変わろうとしていた。

だが、石油大国が経済の崩壊を辿る一方で先進国や各国の化学者達は石油に代わる新たなエネルギー物質を発見した。

そのエネルギーは『無限のエネルギー』と名付けられた。
インフイニティエナジー

このエネルギーは突如宇宙の太陽系に出現した星から発せられるエネルギー物質が地球に降り注いでいることが、後の研究によって判明された。

『無限のエネルギー』なんてたいそうな名前が付いているのは単に誇大してるわけじゃない。

このエネルギーは地球を包むように世界に溢れている。

またこの無限のエネルギー、略して『インフイニティエナジーENG』を使った機械は全て、使った

エネルギーを『∞ENG』として排出することができる。

つまりは石油を使うと二酸化炭素やら有害物質が出るに対して、

『∞ENG』はそのまま何にも変わらないことが

わかったのだ。

だから『無限のエネルギー』なのだ。

しかしこの『∞・ENG』を使える装置の開発に大分手間取ったらしい。

何たつて未知のエネルギーだからな。

だがこのエネルギーは謎が多く、このエネルギーを発する星――

――『unkown』に無人探査機

を送り調査を試みたが、どういわけか無人探査機は辿り着けず、
消息を絶っている。

これも一つの謎だ。

だが謎はほかに幾つかある。

まずは人体が以前の人類に増して運動能力、視力、反射神経、その他色々な能力が飛躍的に向上したことだ。

それは人のみならず、あらゆるものに変化を与えた。

さらに最も不思議で謎なものが人にだけ対して発現した。

それは『Dスキル』^{ディメンション}というものだ。

このスキルは何が目的なのかさっぱり解らないが、武器を想像し、
顕現できる。

Dスキルによって顕現された武器を俺達は『^{イマジネーション}幻想武器』と呼ぶ。

武器、といってもそれは様々だ。

例えば刀や銃といった完璧な武器だったり、巨大なレンチやお玉
にフライ返しといった主婦の武器だったり……

その守備範囲は幅広い。

実態は完璧には把握されていないが、体内に蓄積された『∞・ENG』
を変換しているらしい。

だが実際にそれ相応の能力があるわけではない。

この幻想武器は物理的な攻撃も確かにあるが、その殆どを内面に
ダメージを与える。

つまりは精神力といったものを削るのだ。

それでも人を傷つけられる為、『インフィールド』が開発された。

『INフィールド』とは『幻想武器』を展開した際に発せられる微量の『∞・ENG』に反応し、『∞・ENG』を散布してバリアフィールドを展開する。

“ Infinite energy”の頭文字を取って“IN”、そこにバリアフィールドのフィールドで『INフィールド』になる。だがまあ、これにも少し限界がある。

一定量の攻撃を受け続けたりするとフィールドの『∞・ENG』が減少して消えてしまうんだ。

暫らくすれば回復するんだがなかなか時間が掛かってな、これがそれに全てのダメージを受け止めてくれるわけじゃない。

あくまで軽減だ。

でも一応『INフィールド』には生命維持装置みたいなものも付いている。

その人間の生命に危機的なことが迫った場合、装置が一時的にだがその生命活動を維持できる機能がある。

それと顕現できる物はその人間の感情や精神力の強さ、イメージなどが影響するらしい。

つまり心といったものが影響を及ぼしているのだ。

身近なものほど顕現しやすく、武器らしくなればなるほど顕現は難しい。

顕現できるものによってランクが付けられ、そのランクに見合った物しか顕現は難しく、できない。

それぐらいだ。

特にこれといって害になるものは発見されてはいないし、『Dスキル』も特に副作用はなかった。

これらについても研究は進められているが全くもってお手上げの状態らしい。

それは西暦2232年になった今でも変わらない。

それに空飛ぶ自動車や、宇宙世紀のようにコロニーがあって宇宙に住めるということはない。

まあ、月とかまでの宇宙旅行はできるがな。

結果的に言えば、一時的に危機を逃れてからあまり進歩してないのだ。

『∞・ENG』によって進化したが、それと同時に生命体も皆平等に進化した。

せいぜい『Dスキル』を使った戦争というスポーツが世界で流行っていることだ。

国も認める公式スポーツにまでなっている。

ルールは至って簡単。ただ相手を倒す、それだけだ。

バトルステージは基本どこでも可。

細かいルールはそれぞれで決められるという何ともフリーダムなものなのだ。

それでも一応鉄則もある。

一、気絶、あるいは戦線離脱者への追撃を禁ずる。

一、バトルフィールド外での戦闘を禁ずる。

一、無関係者への危害を加えることを禁ずる。

一、ルールは原則絶対である

他にも少しあるがこれが大まかな鉄則だ。

『Dウォーズ協会』の立ち会いの下に行われ、指定人数で、指定範囲内の中で各々の『Dスキル』を駆使して敵と戦う。

そして最後まで生き残っていたチームの勝ち、というシンプルなもの。

これは瞬く間に流行り、国も認める競技の所為か、学校のカリキュラムにも加えられるほどだ。

理由はやはり、有能な選手育成のほかに、『Dスキル』の正しい

使い方を学ばせる為でもあるらしい。

それは『Dスキル』を使った暴行事件とかが起こるようになったからだ。

それは一つの社会問題にもなっている。

だがまあ、身体とかが進化しても交通事故で死ぬこともあるし、病気で死ぬこともある。

根本的な所は変わらないわけだ。

——そんな世界で綾瀬刹那^{あやせはな}こと、俺は生きていた。

00・西暦2232年の世界（後書き）

初めまして、またはお久しぶりのunkonownです。

初めて読んで下さる方、もしくは『光と闇とあいつと私の異世界二重奏』を読んで下さってる方にお礼申し上げます！

この作品で二つ目です。

今回は学園ものを投稿してみました。

少々文面がアレかもしれませんが、どうぞよしなに。

続きも読んで下さいね！

01・刹那を取り巻く世界

「今日はカレーにするかなー？」

「カレーですか。良いですね、たまには。兄さんの作るカレーは美味しいですから♪」

夜の21時にもなる商店街を歩きながら今夜の晩飯を話し合う俺達。

俺の名前は綾瀬刹那^{あやせせつな}、高校二年の十六歳の高校生だ。

髪は黒、瞳も黒、身長は平均男子に比べて少し高い。ルックスは平凡、妹に言わせればそこそのルックスらしいが俺はそうは思わん。

成績は中の下、せめてのものは運動が多少良いことぐらいの何ともない高校生だ。

「でも兄さん、急がないとお店が閉まっちゃいますよ？」

「やべっ！急げ急げ！夕夏^{ゆづか}も走れ！」

「ちょ、ちょっと待って下さーい！」

俺のことを『兄さん』と呼ぶこの少女。

当然俺が趣味で呼ばせているわけじゃない。

名前は綾瀬夕夏^{あやせゆうか}、俺の実の妹だ。

長い黒髪を後ろで纏めており、瞳は俺と違ってどんぐりのような茶色の瞳、身長は平均女子より少し高い。

で、これまた俺と違って容姿は正に美少女と言えるレベル。体格もスレンダーながら出るところは出ていている。

兄として誇れるよくできた妹で勉強に運動と文武両道、さらには面倒見も良いときたまんだから男女共に人気が高いこと高いこと……

ほんとに俺の妹か、と疑いたくなるほどのできた妹だ。

だがそんな妹、如何いうわけか未だに彼氏がいないのだ。

理由としては告白を全て断っているらしい。

まあ、兄としては複雑な心境なんだよな。

変な男と付き合わないか心配だし、それでもいい加減誰か一人と付き合ってみるのも悪くない年頃。

夕夏には甘酸っぱい青春の1頁を送って欲しいのだ。

おっと、話が脱線したな。

で、えーと俺は何してたんだけ？

「兄さん！聞いてますか？」

「あ、何が……？」

「はあ、聞いてなかったんですか……だから春香ちゃんもカレーで良いそうです」

「お、そうか。なら早いとこ帰って飯にしなきゃな！」

行きかう人達の隙間を縫うように目的地のスーパーへ向かう。

商店街のあちこちからは賑やかな声が飛び交い、明るくそれでいて温かい雰囲気だ。

俺はこの街の、この商店街の雰囲気が結構気に入ってたりする。

だからこそ、彼女の存在は浮いていた。

何故なら手にはハンドガンを持ち、何かから逃げるように走っていたからだ。

いや、実際に逃げていた。

複数の男達が女の後ろを追走していたのだ。

あれは如何見ても追いかけてるようにしか見えない。
女はそのまま裏路地に逃げ込んだ。

「……………」

「兄さん？どうかしま……………」

不意に足を止めて真面目な顔になっていた所為か、夕夏は俺の顔を覗き込むように俺の目を見た。

俺の目線を辿ったんだろう、あの連中を見て夕夏も口を噤む。

「…………様子を見よう」

「…………はい」

俺達は静かに裏路地の様子が見え、尚且つ気づかれない場所に移動した。

「はあ、はあ、はあ……………」
「たたく、あんた達しつこい！一体何の恨みがあつて襲つてくるんだよ！」

逃げ込んだ路地は丁度行き止まりだったらしく、女が振り向いて男達に大声で聞く。

それに対して男達はニタニタ気色の悪い笑みを貼り付けながら徐々に距離を詰めていく。

「うつせえんだよ。お前が俺の有り難い誘いを断つたのがいけねえんだ」

「はあ！？何その理不尽な理由！ナンパして断られたくらいでそれ

「はいんじゃない！」

「だからうつせえんだよ！俺にとっちゃくらいですむような問題じゃないんだよ！礼はたっぷりと帰させて貰う。お前ら、遊んでやれ」

「うわー……可哀想に、随分くだらん理由で追っかけられてたのか。まあアイツなら大丈夫だろ。一応見届けるか。」

『換装！』

男達が声を揃えて叫ぶ。

するとそれぞれの武器——イマジンウエボン幻想武器を顕現させる。

種類は様々に、木刀にメリケンサック、金属バット、チェーンなど……

あいつ等の幻想武器はそのまんまを見事に表してるな。

因みに武器にはランクがあり、そのランクに見合った武器しか顕現できない。

「ふざけんなあ————！！！」

武器を携えて突っ込んでくる男達に対して手に持っていた幻想武器の銃を連射しながら叫ぶ。

「ふざけんよあたしが何であんたのそんなくだらない理由でリンチに遭わなきゃいけないの！てかだったら最初からナンパなんてことすんなよ！そーだよ最初からするなつうーか一生すんな！迷惑だ！！」

相変わらずの早口だな……水が流れ出るかのように一息で言葉が連射されていく。

それに合わせて弾も連射されていく。

スチエツキン・マシンピストル。

装弾数が20発な上にマシンガン、とまでは言わないがかなりの連射力を誇る銃だ。

ばら撒く様に撃つただけで先頭を走っていた何人かが次々に倒れていく。

死んじやいないが、殆んどが気絶していく。

武器の威力は実物に匹敵するもの、それが死ぬか死なないかの違いだけだもんな。

「おらぁー！ーっ！上ががら空き……ぶっ！？」

あちゃー！痛い！今のは絶対痛い！！

俺がやられたわけじゃないのに物凄く痛く感じる！

ほかの連中も皆男だけが持つ急所を押さえる。

よりによって男の大事な部分を蹴り上げるなんて……！

蹴られた本人なんかは白目を剥いて気絶してる始末だ。

いくらINフィールドがあるつつても幻想武器じゃない攻撃は殆ど通っちまう。

「お、お前！何てことしやがる……！お、男のシンボルをぞ、そんな、そんな……！」

「うつさい。男がいちいち喚くんじやない。我慢しろ」

「そういう問題じゃねえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

クソッ！あんなことされて叫ばない男なんているわけねえだろ！？

アソコはどんなに頑張っても鍛えられないからな！？

屈強な武士もののふでもアソコを蹴り上げられれば一発KOだ。

「ああ骸になる♪ ああ死体になる♪ 生か死かはあなた次第なの
♪ ああ今夜だけ ああ今夜だけ もおどおにも止まらない♪ あ
あ骸になる♪ ああ死体になる♪ 生か死かはあなた次第なの♪
ああ今夜だけ ああ今夜だけ もおどおにも止まらない♪」

勝手に歌詞変えた歌を口ずさみながらスチエツキンの弾を撃ち尽くす。

こええ〜！こええよ！

当事者じゃないとこんなにも怖いものなのか！？

「兄さん……今さら気づいたんですか？」

我が妹が半眼でこつち見つめながら小さく言ってくる。

俺は気まづくなりながらも敢えて無視して状況を確認する。

「はあ〜っ ♪ か・い・か・ん……！」

うつとりとした表情でそんな言葉を洩らす。

「く、クソツたれ……！トリガーハッピーかコイツは！」

うん？何だ、上に人影が……

む、連中の仲間か。

なるほど、頭上から奇襲を仕掛けるつもりだな。

連中のリーダーっぽい男が時折上に視線を走らせたのはこういうことか。

「仕方ない、いっちょやりますか」

「兄さん、だつたら最初から助ければいいんですよ」

「いやだつて大丈夫だろと思つたんだ。ほらでも仲間が増えたんじやきついだろうと思つて助太刀するだけであつてだな……」

「ちゃんとした日本語を話して下さい。……でも兄さんのそういうところは好きです／＼／」

頬を薄ら赤く染めて微笑む妹の夕夏。

「よく分からんがさすが俺の妹。俺の良いところをよく分かつてる。ありがとな」

妹でも女の子にありがとうと言われれば素直に嬉しい。

「むう……。兄さんのそういうところは嫌いです」

途端、不機嫌になる夕夏。

えゝつと、何故に？

「それより行きますよ、兄さん。もたもたしてる内に動き出しましたよ」

「「換装！」」

？

「そんじゃあんたも逝つとく？」

「な、舐めんじゃねえぞ。おいお前らかかれ！」

合図とともにビルの上から飛び降りて女を囲む。

「げっ！まだこんなにいたのかよ……」

「へ、へへっ。今度こそ終わりだ。やれー！」

『ぎゃあー！ー！ー！』

「……！？」

「終わりましたね」

「何が、起こったんだ？いや、お前は誰だ！？」

「誰だと言われても単なる通りすがりだ」

連中のリーダーが俺の声に慌てて振り返る。

コイツの仲間は夕夏が高速で懷まで踏み込んで幻想武器の薙刀で全員を一撃で薙ぎ倒した。

夕夏の戦闘能力を舐めちゃいけない。

「あんたの仲間は皆仲良く気絶してるがどうする？まだやるか？」

ま、俺は勝手に出てきて喋ってるだけだな。
手を下したのは全部夕夏だし。

「三対一。どっちが不利かは一目瞭然だが……」

一歩、また一歩と近づきながら言葉を紡ぐ。

徐々に威圧し、追い詰めていくに連れ、男は遂に雑魚キャラの定番台詞を残して逃げて行った。

「お、覚えてろー!」

今時その台詞はちよつとどうかと思うぞ。

「いやー助かったよ、さすがだねー!」

「お前は銃の乱射のしすぎなんだよ。もうちよつと狙って撃ってみろ」

振り返りながら女にそう言う。

「そんなこと言うなよー。あたしとせつちゃんの間だろー! ねー、夕夏ちゃん?」

「え、えつと、そうなんですか?」

夕夏が返答に困るといった具合で答える。
いや答えにはなっていないか。

「その呼び方はあんまり好きじゃないんだがなー……」

「細かいことは気にするなせつちゃん」

俺のことをせつちゃんと馴れ馴れしく呼ぶこの女。

実は俺のクラスメイトで数少ない親友でもある。

かんざきつき
神崎皐月。

ダークブラウンの髪をポニーにしており容姿は精緻で綺麗、つまりは美がつくほどの少女。

さらには身長もそこそこある上にグラマーのような体格。

性格は明るくボーイッシュなために男女ともにやはり好評だ。

どういうことがこいつとは気が合うらしく、よくつるむことが多い。

「助けてくれたのはいいんだけど、刹那は何でこんなところにいるの？」

ルビー色の瞳を瞬かせながら首を傾げて聞いてくる。

「兄さんまずいですよ！すっかり忘れてました！」

「そうだった……！夕飯の買い物に来たんだった。急ぐぞ夕夏！まだ間に合う！」

こっちに構い過ぎていた所為で大分時間が経っている。

急げば十分に間に合うが家で待ってる春香のことを考えるとゆっくりはしてられない。

「そっかー、じゃあお礼は今度にするよ。さつきは本当に助かったよ」

「ああ、悪いが急いでるんじゃないあな！氣をつけて帰れよ！」

適当に別れを告げて俺達はその場を後にし、スーパーへと足を運んだのだった。

「ただいまー」

「ただいま帰りました」

家に無事帰ると出迎えたのは後頭部への多大なダメージだった。

「ぐはっ！」

家の中に入るなり何かが俺へ突進、そのまま押し倒されながら俺の頭は玄関のドアノブに見事ヒット。

そして追加ダメージとして倒れた衝撃が襲った。

「に、兄さん！？大丈夫ですか！」

「あたた………大丈夫だ。ったく、春香よお願いだからそのオープン・ザ・ドアした瞬間に飛び込んでくるのは勘弁してくれ」

「……お兄ちゃん達、遅い」

俺に飛び込んできた少女——綾瀬春香あやせはるかは不機嫌そうにしながらも俺の胸に顔をすり寄せていた。

肩辺りで切ったくすんだ茶髪を手で梳きながら宿めに掛かる。

思いつく謝罪の言葉を心込めて言い続けると、許してくれたのか俺から離れた。

「お兄ちゃんにお姉ちゃん、何で遅かったの？」

どうも理由を聞く為に一度離れたらしい。

こりや回答によっちゃ酷い目に遇うことは間違いない。

何も悪いことをしてないのに俺は慎重に言葉を選びながら事の成り行きを話した。

途中夕夏が補足してくれながら、事情を説明し終わると、春香は微笑んだ。

「そっか。だったら仕方ないね」

春香は頷くとご飯にしょ、と言ってリビングに向かっていった。

そうだった、今日の料理担当は俺だ。

早く支度しないと。

夕夏も一度着替えに自分の部屋へ向かい、俺はキッチンにて晩飯のカレー作りに勤しむ。

おっと、そういえば春香の紹介がまだだったな。

あやせはるか綾瀬春香、名字からも分かると思うが春香も俺の妹なのだ。

つまりは俺と夕夏、そして春香の三兄妹。

俺が一番年長者であり、二人の妹は俺の一つ下だ。

性格は夕夏程じゃないが真面目だが、天真爛漫で明るい。

幼さが抜けてないその顔や身長が少し低いのも相まって、見ているだけで癒されるようなそんな感じの子だ。

それとなんだが春香は俺の実の妹ではない。

夕夏は実妹だが、春香は義妹なのだ。

それは本人も知っており、飛行機事故で親を亡くした春香を親戚だった俺の親が引き取ったのだ。

まだあの時は夕夏も春香も八歳で俺が九歳の時だったかな。

当時は少しばかりぎくしゃくしていた感があったが次第に打ち解けて、今じゃ本当の兄妹だ。

「おい、もうそろそろ席に着けー。刹那特製カレーライスが出来るぞー」

二人の妹ともう二人の住人に呼びかける。

『はい！』

元気の良い返事が我が家に今夜も響く。

？

ピッ！ピッ！

「すー……すー……」

ピッ！ピッ！ピッ！

「……うん……」

ピピピッ！ピピピッ！ピピピピピピピピピピピッ！

「……………」

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピ——

「だーっ！クソうるせえー！」

眠りを妨げる目覚ましを叩き潰すようにボタンを押す。

あー最悪だ。

それに眠いし、眠いし、眠い。

カーテンの隙間からは朝日が零れ、部屋の中を照らし出す。

変形した時計で時間を確かめる。

おかしいな、一応飛行機が上に墜落しても耐え得る強度がこの時計の売り文句だったんだが……

また買い換えるか……な？

ベットから這い出ようと手をついた瞬間、温かくそれも程良い弾力のあるムニツとした感触が伝わってくる。

「んっ……………」

そして下から聞こえてくる可愛らしい小さな声。

は？何だ今の声は？

それにこの手触り、これは明らかに人工のものじゃない自然なもの。

俺は恐る恐る手をついた場所を見る。

そこには規則正しい寝息を立て、安らかな眠りを満喫している美少女がいた。

ぶかぶかのワイシャツ一枚に可愛らしい水色の縞パンツだけとい

「何とも興奮す……げほげほっ！」

「何ともラフすぎる格好で眠っていた。」

「そして俺の手は予想通り、その、何と言つか、彼女の胸の上についていた。」

「まずいまずいまずい……！」

「マジでまずいですよ俺！」

「こんなところをあの二人に見つかりでもしたら、俺の命は風前の灯間違いなしだ。」

「兎に角こいつをどうにか隠さないと——」

「兄さん、起きてるんですか？入りますよ」

「ぎゃあ——！今最も来て欲しくない時に！」

「ええい仕方ない。斯^かくなる上は手段を選べない！」

「珍しいですね、兄さんが自分で起きるだなんて」

「あ、ああ。その代わりにまた目覚ましが仏に召されたけど……」

「事実俺の目覚ましは時を刻むのを止め、床に転がっている。」

「夕夏はそれを拾い上げ溜息を零した。」

「はあ。兄さんこれで何個目ですか？」

「え……えーと、確か今年は15個目？」

「今年は既に24個破壊してます。去年の時点で100個は粉碎してますね」

「去年このことで皐月に『目覚まし時計の破壊者^{アラームブレイカー}』という、何とも

不名誉な称号を頂いた。

今年こそは撤回させる気だったんだが、この調子だと更なるランクアップが待っていきそうだ。

「それより兄さん、早く出て下さい。布団を畳めません」

「い、いや！今日は俺がやる！ほ、ほら久しぶりに自分で起きたからな！な！」

「いーえ！私が畳んでおきます。兄さんは顔を洗って来て下さい――（でないと兄さんの布団の匂いが嗅げません）」

くっ、食い下らない気が……！

どうする、どうするよ俺？

「はっ……！わ、悪いがそれは出来ん。それより兄さんはこれから着替えるから部屋を出てってくれないか？」

「分かりました。でも先に布団を片付けたいので後にして下さい」

何という頑固な妹だ。

今この場において妹の真面目な性格が恨めしい。

「その、だな。兄さんも男だ。分かるだろ？朝はその……下が、な」

できれば言いたくはなかったがこの際だ。

そう言つと夕夏は一瞬訝しげに首を傾げたが、何か思い当たったのだろっ、顔が一瞬で熟れたトマトのように赤くなり、下に俯く。

因みに俺はなっていないぞ。

あれは絶対に起こるものじゃない。多分。

さすがの夕夏でもこれでは対処できまいよ。

そう俺が思ったのも束の間。

どうやら俺の考えは砂糖100パーセントオンリー入った牛乳より甘かったらしい。

この妹、俺の考えの直角90度上を行くらしい。

顔を上げた夕夏は頬を上気させつつも、片手を口に当て、とんでもないことを言ってくれた。

「……兄さんのだったら……別に見てあげても……いいですよ……」

ぼそぼそと小声だったが、俺の部屋は静かで、その声ははっきりと聞こえた。

「ちょっと待て！冗談だよな！？いくら兄妹でもそれは困る！いやお前が困らなくても俺が困る！」

やめてくれ！マジやめてくれ！色々な意味で。

そういうことをほかの男子にでも言ってみろ、誤解が起こり、襲われたりするかもしれんぞ。

しかし弱った。

夕夏に俺の布団の中を見られるわけにはいかないんだ。

ん？おねしょとかじゃないぞ。

「そ、それよりお願いだから早く出てくれ。このままじゃ学校に遅刻しちまう」

事実この無意味に等しいように意味あるやり取りをしている間に、時間は刻一刻と過ぎていた。

「仕方ありませんね、それじゃ下で待ってますよ」

「ああ、すぐに行くよ」

そう言つと夕夏は部屋を出て行った。
はあ、助かった。

「何がですか？」

「どわあっ！」

俺が安堵の息を吐いた時、部屋の前にはリビングにいったはずの夕夏が半眼でこっちを見ていた。
どうしてまだそこにっ！？

「どうしても何も、兄さんの挙動が少しおかしかったので」

しまった、嵌められた！

もう手がない……！

さようなら、友人達、さようなら、世界、さようなら、俺の人生

……

「一体布団に何隠してるんですか」

ベットに近づいて来て布団に手を掛ける夕夏。
終わった、何もかも……！

「……………」

「……………」

無言。

「……………」

「……………」

場を満たすのはただただ無言の重圧のみ。

「……兄さん、これはどういうことか説明して貰えますよね？」

「……はい」

飽くまで穏やかに、そして優しく、それでいて殺傷能力があるなら致命的ダメージ間違いない殺意が込められた綺麗な声で俺に聞いてくるのであった。

いや寧ろ、俺にはNOと言える権限すらない。

ただ俺は頷くままにこれから始まるであろう地獄を耐える術意外に道はない。

「刹那あー……………」

隣に眠る少女が夢見心地の甘い響きをもった声で俺の名前を呼び、そして俺に止めの一撃とも言える行いを実行したのだった。

「チュッ」

少女は唐突に俺の頬にキスをした。

そして俺の地獄行きは無限地獄へと変貌することになったのだった。

少女は何事も無かったかのように再び夢の世界に、いやもともと

夢の世界か。

少女から夕夏に視線を戻すと、そこには体を震わして俯く夕夏がいた。

まずい、怒りの限界地点を突破する……！

「死んだな、俺……」

朝から家には俺の絶叫が響き渡り、少女の寝息はそれでも静かに続いていた。

「で、お兄（兄さん）ちゃん。これはどういうこと（ですか）？」

今現在、夕夏の幻想武器によって半殺しに合い、リビングで不当な尋問が繰り返されていた。

そこにプラス春香が加わり、より濃密な殺意がその場を支配していた。

「どうしてノエルちゃんがまた兄さん（お兄ちゃん）の部屋のベツトにいるんですか！？」

俺の腕に抱き着いて猫のようにゴロゴロする少女——ノエルを指差しながらヒステリックに叫ぶ夕夏と春香。

「そう言われてもな、ノエルだって家に住んでるわけだし……」

「だからって何で兄さんと一緒に寝てるんですか！？」

「そっだよ！」

相変わらずこの空気の中を何食わぬ顔でいるノエル。

そっ、彼女は我が家に住むもっ一人の住人だ。

別に家族や親戚だったりするわけじやい。

だからと言っ俺の彼女や許嫁いいなすけでもない。

存在そのものが謎に包まれたミステリー美少女だ。

は？何言ってるか分からないって？

俺だっ分らない。

言葉の意味そのままだ。

ある日突然出会い、気づいたら家に住み始めていた。

ノエルとの出会いと素性については話すと長くなるので今度話すことにしよう。

ノエル。

年齢は一応十六。出生不明、出身地不明、種族不明といったアン
ノウンガール。

因みに種族不明というのは理由がある。

人であっ人でない。

人でなくて人である。

そっいった存在なのだ、彼女は。

これについても面倒だし、俺自身未だに解らないところがあるか
ら何れ語る事もあるだろっ。

容姿は正に完璧と言っいいほど整っっている。

すべらかで滑らかな白い肌、そしてさっき触った時思ったが程
良い大ききの整った胸。

スポーツカーや新幹線の流れるようなフォルムに似た綺麗な曲線
美。

ミントブルーの髪をツーサイドアップにし、アメジストのような
瞳を持つ。

そんな彼女は如何いうわけか俺にやたらと懐いており、よく布団に潜り込んでいることがある。

どっかで言ったかもしれないし、言っていないかも知れんが一応俺も青春をエンジョイする予定の男子だ。

予定、という部分はどうか察して欲しい。

つまりは内心ドキドキハラハラのうれしはずかしのイベントなのである。

間違っても間違いは犯さないが、その……な。

同時に俺の死亡フラグの確立でもあるので、出来れば自重して欲しい。

でも心のどっかでは一緒に寝たい！

そんな葛藤が俺の心の中を支配していた。

そして妹達が怒っている理由についてはよく分からんが、きつと年頃の男女が一緒に寝るのは不味いということを言っているのだろう。

それで俺が間違つてノエルを襲わないか心配してるんだろうな。

因みに一応ノエルの部屋はあるんだが、殆どをリビング、俺の部屋、そして屋根の上で過ごしている。

「な、なあ……いい加減許してくれ。俺は何もしてないし、そろそろ行かないと遅刻するって。俺これ以上遅刻ができないんだ。遅刻常習犯として先生に目を付けられてんだよ」

「自業自得です！それよりノエルちゃん、兄さんの部屋には余り近付いちゃダメですよ」

「そうだよ、わたしだって最近はお兄ちゃんと一緒に寝かせて貰ってないんだよ」

いや、この年になると一緒に寝るのは恥かしいんだよ。

普通は向こうから拒絶するものだと思うんだが、こいつらはその逆でどんどん積極的になってきてる気がする。

特にノエルが家に住み始めるようになってからだったかな？

「刹那はいやって言ってる。だから平気」

そう言うときまた俺の腕に抱き着いて頭を肩に預けてくる。

「むうー！ー！」

すると夕夏と春香は頬を膨らまして俺を睨む。

何故に俺が睨まればならん。

（私だって兄さんと腕を組みたいのに……！）

（こないだなんか背中を流そうと思ったたらすぐにお風呂から上がったちゃうし……）

「刹那、学校に行こ？」

「そうだな、それじゃ二人とも、先行ってるからな」

俺はそのまま鞆を持って家を出ようとする。

すると考え事をしていて反応が遅れた二人が後ろから叫んでいたが俺は早足に家を出た。

あのままいたらいつ解放されるか分からんからな。

「兄さん！まだ話は終わってませー！ーん！」

家を出て数十秒後、後ろから薙刀を持った夕夏とダガーを装備し

た春香が追いかけてきていた。

「まずい！走るぞノエル！」

「うん」

ノエルの手を引いて全力ダッシュをする。

後ろからはダガーが飛んでくるはスピードを落とせば薙刀が接近してくるはと危険で、止まることは許されない。

力ずくでも捕まえる気が！

「ダガーを兄に向って投げるな！危ないだろ！」

「これもお兄ちゃんのためだよ！愛の鞭ってやつ！」

「これはどう見ても愛の鞭じゃなくてナイフだろ！？」

「じゃあ愛のナイフ投げ！」

「なおさら物騒だなおい！？」

そんなやり取りを繰り返しながらも無事聖夜学園に辿り着いた俺は自分の校舎に向かう。

遠くから「帰ったらじっくり話し合いましょう」なんて言葉が聞こえたが、とにかく今は気にしないでおう。

聖夜学園。

広大な敷地内に小中高がある学園。

よっぽどのことがないかぎりは進学できるエスカレーター式を取り入れている私立の学園で、小学年から居る者や、途中から入って来た者もいる。

そして聖夜学園には様々な人間が通い、金持ちの生徒や頭の良い生徒、スポーツに秀でた生徒に一般生徒。

そんなあらゆる人間が通う学園で、勉強にスポーツ共に有名な学園である。

それぞれには校舎があり、エリート達用の校舎があったりする。

エリートというのはそのままの通りだ。

これは成績が驚くほど良い奴や何かに対して優れた連中を指す。

後は金持ちや、有名人の子供とかだな。

これは聖夜学園の理事長が配慮したものだ。

こういった連中の中には、俺達一般人を見下したり、差別的な考えを持った奴がいるからだ。

それを考えた上での制度と、その親達からの圧力とかなんだろう。だがまあ中にはそれを断って、俺達一般校舎で共に青春を過ごす道を選ぶ者もいる。

それにエリートの全員がそういうわけではない。

とりあえず説明はこれくらいでいいだろ。

俺達を取り巻く環境はある程度分かったか？

といっても、これはまだほんの一部にすぎない。

まだほかにも癖の強い友人がいるし、学校での生活もある。

今日も騒がしくも賑やかな一日が始まるのだった。

01・刹那を取り巻く世界（後書き）

どうもunkownです。

連続で後もう一話投稿します！

02・厄介な友人達

「はあく、疲れた……」

自分の席に着くなり、俺は机に突っ伏した。

「よお、今日は遅刻しないのか？」

疲労困憊している俺に気遣い一つなく近づいてくる影一つ。

声で誰かは解るし、この俺に話しかけてくる奴はそうはいない。
嫌々ながら顔を上げると、そこにはやはり知った顔があった。
俺の悪友こと、相葉一哉がにやにやした顔でそこにいた。

「なんだ、バ一哉か」
カサヤ

「なっ！？誰がバ一哉だ！このっ、……えーと、あー……」

「思いついてから言おうな！。まあどうせバ一哉のことだ。大したもんは出てこないだろうがな」

「な、舐めるなよ……！俺だって一つや二つ……うーん、えーとな……」

またしても下らないことで思考の海に溺れだす。

今までこいつがまともに俺への名前をもじった罵りが言えた試しがない。

とりあえず無視だな、構ってると余計に疲れる。
相葉一哉。
あいばカサヤ

こいつとは中学の頃からの仲だ。

容姿はそこそ良く、運動も出来る野郎なんだが、性格に欠点があつて未だに彼女が出来てない可哀想な奴だ。

自業自得だな。

こいつは重度の女好きなのだ。

可愛い娘を見かければすぐに口説こうとする馬鹿な男なのだ。

その為に一部の女子からは親の仇を見るような目で見られていたりする。

本当に可哀想な奴だ。

そして何故そんな奴と友達かと聞かれれば、解らん。

きつかけ、なんてものはそうそう憶えてるもんじゃない。

知らぬ内に友達にさせられていたとしか言えない。

そんなものだ。

「朝からなに騒いでんのよ？」

教室の入り口辺りから俺達に尋ねてくる声。

これまた顔見知りの者の声だ。

「別に。特に何もしゃいないさ」

「ふーん。それより刹那、今日は遅刻しなかったんだ」

「どうしてお前等はどいつもこいつも……」

「いや、さっき会長さんが怪しげな笑み浮かべながらあんたの処罰を考えてたから」

「詩乃、それはほんとか？ははははっ！無駄なことだ。今日は遅刻し……」

「してようがしてなかるうが、罰は罰だ。それもボクが考えたもの。受けて貰う。そして身の内に刻み込め」

突如俺の言葉を遮ったこの偉そうで不遜そうな態度の声。

「って会長！？何故ここに……！つーか罰って。今日は遅刻してないですよ！」

「言ったるう、してようがしてなかるうが受けて貰うって。わざわざボクが考えてやったんだ。それが嫌なら我が労力になるか？綾瀬刹那、お前に拒否権などそもそもあったか？」

「……いえ、ありません」

ああ、結局は如何することもできないのか……

あれを公開されるわけにはいかん。

しのはらう
篠原詩乃。

うちのクラスで俺の数少ない女友達の一人だ。

淡い水色の髪を無造作なショートにしており、片側だけ紐で結えた髪の房が特徴的な少女だ。

ミッドナイトブルーの瞳は、覗き込めば吞まれてしまいそうな深い色をしている。

性格はクールなイメージを受けるが、そうでもない。

寧ろ寂しがり屋というかちょっと弱いところがあり、時々見せるそんな部分がちょっと可愛いのだ。

まあ一人で抱え込んでしまうところがあれだが。

会長こと、桜井カノン。

父親は日本人、母親を欧米人に持つハーフの我が校の生徒会長で、母親似の金色の髪を綺麗に切り揃えたショートにしている。

瞳は空のようなスカイブルーの色。

年齢的には俺の一つ上のボクっ娘先輩なんだが、背が少し小さいことにコンプレックスを持っている。

そして人の弱みを握って俺をいいようにこき使う先輩なのだ。

「ところで会長、その罰は一体どんなものですか？」

詩乃が控えつつも質問する。

会長が思案顔になりつつそれに応答する。

「そうだな、今日は一応ながら遅刻はしなかったんだし、少し簡単なものにしよう」

「……どうせならしないで下さいよ」

俺の小さな、ほんとに小さな呟きを会長は聞き逃さなかったのか、口元がニヤリと笑う。

「そうか、別にボクは構わないさ。その代わりと言ってはなんだが、この写真を……」

「すみませんでしたー！この私めになんなりとお申し付けくださいー！」

俺はそう言って自分の言動に今更に気付き、後悔する。

ああ、俺は一生この会長に頭が上がらないんだなあと感じてしま

う。

不幸だ。

「ふふふっ」ならそうだな……生徒会の雑務と事務仕事を一週間全てやって貰おうか。それとボクの周りのことも」

「イエス・ママ」

「声が小さい!」

「イエス・ママ!」

こんなことを繰り返した後、会長は俺に釘を刺して教室を去っていった。

最悪だ、最悪すぎる。

雑務と事務仕事はあそこは半端ない。

つか雑務と言っても殆ど会長のお世話に近い。

「刹那、大丈夫?」

「ああ、とりあえずな。やっぱりノエルは良い子だ、うん」

今まで黙っていたノエルが俺を気遣ってくる。

そんなノエルに対して頭を優しくなでて礼を言つと、彼女は目を伏せてそれを受け入れる。

「そ、それより刹那。今日現国を忘れたの。一緒に使わせて貰っていい?」

「別に構わんぞ」

「ハッロー!せっちゃんにしののん!それにノエルちゃんもハッロー!」

皐月のそんな声と同時にチャイムが鳴り響き、担任の一声で賑や

かだった教室が静寂を取り戻す。

ずっと一人で考えていた一哉も気付けば席に着いていたが、未だに考えている。

ほんとあいつは馬鹿だな。

？

「紅茶を入れろ、それとシヨコラとブルーベリータルトも持ってい」

「そんなに食ったら太りますよ？」

「よし爆撃機を用意しろ。なに、ちょっと面白い写真を校内に……」

「すみませんでした！今すぐ用意します！」

「ん？そうか。すまない、さっきの話は無しだ」

くそう、相変わらずこの人は……！

人が善意で忠告したのに、電話で爆撃機まで用意して人を脅すか普通。

心の中で愚痴りつつも、指定された紅茶とケーキを用意して持つて行く。

時は放課後、場所は生徒会室。

そして俺は会長の召し使いに成り下がっていた。

ほかの皆はそれぞれ帰った。

詩乃やノエル、皐月は待つてくれると言ってくれたが帰した。何時帰れるか分からんからな。

一哉の野郎はさつさと帰って行った。

いつか潰す！

「会長、持つてきましたよ」

「それじゃ次は肩を揉め」

「はいはい」

会長の肩を揉んでいるとふと、その会長が思い出したように話します。

「そういえば綾瀬刹那、君に伝えることがあった。先日、隣町の高松高校から正式なDウォーズの試合を申し出が来ていたんだった。是非ともお前達と戦いたいそうだ。返事は勝手に出しておいた。時刻は三日後の夜8時ジャスト、場所は高松高校でフィールドは高松高校敷地内全て。人数は六人で君がいることが条件だ。ほかの参加メンバーは自由に決めてくれて構わない」

「それじゃあ、とりあえず詩乃と一哉と……って会長！何勝手に試合決めてんですか！？俺聞いてないですよ！」

「今聞いたじゃないか。それに遅かれ早かれ全国と戦う羽目になるんだ。別にいいだろ」

「そりゃまあそうですね……何故会長が。しかしもう決まってる

「ですよね？」

「ああそうだ」

「わかりました。だったら二日以内に参加メンバーを報告します」

仕方ない、後で連絡しなきゃな。

ただでさえ憂鬱な気分がより一層強くなってしまった。

結局帰路についたのは日が沈み、夜の闇に淡く青白い月が昇った頃だった。

「ただいまー」

疲れ果てて我が家に着くと、玄関には白のワンピースを着たノエルが今日の疲れを忘れさせてくれるような笑顔で俺を迎えてくれた。

「おかえり、刹那？」

はあ、ほんとにほんとに良い子だ。

凄い癒されるね。

だがそんな気分も一瞬で撃ち砕くような禍々しい気配を感じた。なんだろう、どこかで感じたような邪悪で濃密な殺意を宿したこの感じは……

「はっ！？」

その気配の正体はすぐに現れた。

ノエルの後ろから二つの影が出てくる。

「兄さん、お帰りなさい。帰って早々に悪いんですが、お話があります」

「お兄ちゃん、朝の件でちよつとね」

現れたのは夕夏と春香だった。

二人ともにこやかに微笑んでるのに目が笑っていない。

今日は厄日だよ、ほんとに……

明日の日の出が見られることを切に願う俺だった。

02・厄介な友人達（後書き）

どうもunkonownです。

序章とも言つべき『00・西暦2232年の世界』をいれて連続三つの投稿でした。

疲れますねえ、この作業。

それにもう一つの作品も入れてだから、作業量が二倍に！
大変です、はい。

さて、今回は授業風景やDウォーズに迫ってみたいと思います。

まあ如何なるかはまだ分かりませんが……

それとこの作品が初めての方は是非とも『光と闇とあいつと私の異世界二重奏』を読んでみて下さい！

そうでない方は今後ともお願いします！

両方共に更新頑張ります！

それではまた次回に会いましょう！

早めのハッピーニューイヤー！

03・雨の中の邂逅 詩乃編その1

詩乃^{しの}、狙撃ポイント確保できたか？」

『配置完了、大丈夫』

無線機を通じて指示を飛ばす。

詩乃はクリア。

「一哉^{かずや}、そっちはどうだ？」

『こっちは問題だ！ たく、敵が集中し過ぎて突破できねえって』

確かに奥からは激しい戦闘音が聴こえてくるな。

仕方ないなあいつは。

「クノン、お前が一番近い。すまないがバー一哉の支援に回ってくれ」

『……了解』

廊下を疾走しつつ指示を飛ばしながら新たな指示を考える。
^{ターゲット}目標の現在位置は体育館。

一哉は体育館に通じる第三校舎の二階の廊下で足止めを喰ってる。

クノンはその支援に行かせたから突破は時間の問題だな。

後は……

「雄作^{ゆうさく}、一人で大丈夫か？」

『俺のことは気にするな。もう片付く』

ということは正面入り口は確保できたってことだな。
裏口は詩乃が狙撃できるようスタンばってるし。

「あとは俺達だけみたいだぜ、なつき皐月！」

「んな事言われなくても無線で聴こえてるよ！さっさと片付けちゃ
お」

進路に立ち塞がる奴らは二人。
男の方はトンファー、女は鎖鎌か。

「ここから先は」

「通さない」

「ご丁寧にも」

それを切っ掛けに分銅の付いた鎖が俺目掛けて飛来してくる。
背中を反らし寸で回避する。

起き上がった時には敵は疾走して迫ってきていた。

俺は後ろに跳躍せず、敢えて相手に向かって駆ける。

女は俺の行動に一瞬動揺を見せるがすぐに戦闘モードに戻る。

距離が一メートルほど詰まったところで俺はH & amp; K U
SPを立て続けに二発連射し、牽制するが相手は構わず走り続ける。

「ちっ！」

俺は鎌が振られる寸前で大きく前方に跳躍して、相手の背後に回
る。

だが相手はそのままの勢いで鎌から手を離し、その刃を飛ばしてくる。

銃口で弾き返して左肩と胸、右の足の付け根にそれぞれ素早く幻想の9mmパラベラム弾を放つ。

排出された薬莢が廊下に落ちる前に駆け出す。

回避行動に移ろうとするが遅い。

三発放ったうちの二発が命中し、怯む。

その隙を逃さず彼女に跳び付いて押し倒し、心臓のある場所二発撃ち込む。

零距离で急所を撃ったんだ、彼女は気絶していた。

イマジンウェポン
幻想武器はあくまで幻想。

死にはしない。

「そっちは……片付いたみたいだな」

「楽勝楽勝！」

さてと、合流しますかな。そろそろ突入路は確保でき――

『パオオオオオーン！パオオオオオーン！』

校内に響くラッパ音。

『……刹那、終わった』

無線から感情が希薄な声が流れる。

「お、クノンか。なんだ、俺達が着く前にけりが付いちまったか」

『結構早く出て来たのよ。それも見事に裏口から。簡単に仕留める

『ことができたわ』

今度は詩乃の声が無線から発せられる。

どこかつまらなそうな雰囲気を感じられる。

期待してたほどの戦闘ができなかったんだろう。

「とりあえずグラウンドに集合してくれ」

「勝者、聖夜学園！」

Dウォーズ協会から派遣された審判員が高らかに叫ぶ。

三日前に生徒会長こと、カノン先輩に勝手に且つ突然言われたDウォーズの試合だ。

「しっかしまあ今回は楽勝だったな！」

「苦戦してたじゃん」

生意気に威張る一哉に的確な突っ込みを入れる皐月。
お前ぐらいだぞ、苦戦してたのは。

「それにしてもクノン、また刹那にくっ付いて！」

「……譲らない」

「なっ！？だ、誰がこんな奴とそんなことっ……！」

俺の腕に抱き着いているクノンに対して詩乃がよく分からないが、

怒っているみたいだ。

つか、こんな奴って……ちょっと酷くないか、それ。

「篠原、落ち着け。相手は後輩だ。それに子供だぞ」

「!!」

「ん？がはっ!？」

馬鹿が。クノンを子供扱いすると脛をとんかちで殴られるのは暗黙の了解じゃないか……。

桜井クノン。

傍若無人な桜井カノン会長の妹君で、俺達の一つ下、つまり後輩に当たる。

会長と同じ金色の髪を長めのツインテールにっていて、エメラルドグリーンの瞳を、伸ばした前髪で少しばかりだが、隠してしまっている。

会長が暴君なら彼女は人形じゃないかと思わせるほど感情を殆ど表に出さないし、喋らない。

容姿が相まって尚更だ。

時々笑ったりしてくれるが、それを見ることは難しい。

表情の変化を見せてくれるのは、心許した者にしか見せてくれない。

俺の前だと小さいながらも微笑んだりしてくれるが、人が多いと無表情だ。

ここ最近の前より見せてくれるようにはなった。

ただ、一哉だけが未だにクノンの表情の変化を拝んだことがないのは別の話だ。

それと会長と同じで小さい。

鷹木雄作。

俺の友人の中ではまともな部類に入るであろう人物だ。

体が大きく、力があり、家柄は江戸時代からある剣道場の家の子だ。

性格は温厚で優しくしっかりしてるが、少々口下手なところがある。

友人想いで、誰かが苦しんでる時は助けしてくれる良い奴だ。因みに学園の剣道部の次の主将を任せられている。

「それじゃ帰るか。皆、今日はありがとな。解散!」

「せつちゃん、また学校でね!」

「一哉、俺達も帰るか」

「くそう、男同士なんてむさ苦しいぜ」

それぞれが帰路の道につく。

「んじゃ、ヘルメット付けてく……」

「……………」

「ほら二人とも、ハーネス留めてやるから顎を上げて」

頬を少し赤くさせて俯く詩乃から先にベルトを固定させる。

「ありがと……」

ボソツと小声で呟く詩乃に微笑みで返し、次にクノンのヘルメットのベルトも留める。

「今度こそ大丈夫だな。それじゃ、クノンは側車に乗ってくれ。詩
乃は俺の後ろでいいか？」

「う、うん」

「……（コク）」

自分もヘルメットを装着し、校門の外に停めてあつたサイドカー
に跨る。

側車にクノンが乗り込み、詩乃が俺の後ろに座つて腕を腰に回す
のを確認する。

アクセルを入れ、エンジンを吹かしてエンジンの回転数を徐々に
上げて走り出す。

街のネオンが暗い夜の空を照らし、空に瞬く星は見えないが、そ
の代わりに月がぼつんと一つある。

その月を視界に収めながら後ろに乗る詩乃に向けて語り掛ける。

「なんか懐かしいな、こうやって二人で乗るのは」

「そつえば前にもバイクの後ろに乗ったけ」

「……ワタシもいる」

季節も時間も違うが、こうしているとあの時のことを思い出す。
それほど遠い過去でもないが、懐かしく感じるものがある。

二年前の梅雨の時期。

学校が終わった放課後、突然降り出した豪雨の日のことを……

——二年前——

詩乃がまだ刹那達と知り合う前のこと。

いつものように目覚ましの騒々しい音で起床した。

寝惚け眼を擦りながら体を布団から出すと、朝のジトツとしながらも冷たい空気が足を伝ってくるのに身を震わしながら、洗面所に向かう。

冷たい水で顔を洗い、眠気を飛ばして部屋に新鮮な空気を入れる為に窓を開けて伸びをした。

「んっ！良い天気！」

気持ち良い朝を迎えると今日は頑張れると感ずることが出来る。

その後はいつも通り朝食を作り、テレビの占いやニュースを見ながら食事をする。

学校の指定した制服に着替えてアパートの部屋の鍵を閉めて学校に登校。

何の変哲もないいつもの日常。

アパートを出て住宅街を歩き、バスに乗って自分の通う学校を目指す。

——バス代、地味に掛かるんだよね。

三十分ほどして目的の学校、秋燈あきとう高校前に着く。

「詩乃ちゃん！おはよー！」

「おはよう！」

バスを降りると後ろから挨拶の言葉が飛んでくる。
振り返ると同じクラス的女子でもよく一緒に話す子だった。

「おはよ、詩乃ちゃん。いきなりだけど昨日、アーガルのリーダーが部室に来て言ってたよ」

「……？」

アーガルというのは秋燈高校のDウォーズのチームの一つ。
詩乃が所属しているチームだ。

「わかった、行ってみるね」

何だろう、と思いつつもその場所に向かう。

玄関からはそう遠くない場所にあるためにすぐに着く。
一度ノックしてから会議室と書かれた部屋に入る。

「よお詩乃。悪いが今日の放課後、試合が入った。ほかのメンバーが殆どスケジュールが埋まっててよ、もうお前しかいないんだわ。
参加してくれないか？」

「参加も何ももう決まってるんでしょ？」

「まあな。リーダー権限で強制参加だ」

溜め息交じりに肩を落としてつつも了承する。

詩乃はアーガルのメンバーであり、彼はそのチームリーダー。

この関係で上なのはリーダーなのだ。

拒否権はよほどの理由でもない限りないし、そもそも予定すらない詩乃にとっては寧ろ有り難い話だ。

詩乃は話を終わるとそのまま教室を目指した。

そんな長居はしなかったが、教室に向かうまでの時間、授業の支度とかを考えるとあまりフラフラしているわけにもいかない時間でもある。

授業を半分ほど聞き流しながら窓の外を眺め、雲の動きを追う。
三限目を終え、世界史の顧問が今の世界について語っている。

「unkown」から放出される「アンノウン EN G」がこの地球に降り注ぐ事によって今の世界は——」

所々が耳を通じて脳に伝達されてくる情報について考えてみる。

そう、この世界は一度、大きな危機に見舞われた。

化石燃料の枯渇。

その危機から救ったのが突如太陽系に出現した「unkown」と呼ばれる星が放つ、「インフィニティエナジー EN G」というエネルギーだ。

人類はその未知のエネルギーを化石燃料の代わりとした。

このエネルギーは化石燃料よりも扱いやすく、幅広い範囲で使えた。

死にかけた人類の文明は「インフィニティエナジー EN G」によって息を吹き返したのだ。

そして「インフィニティエナジー EN G」は生態系にも変化を与えた。

それは些細で小さい、でも大きな変化を。

詩乃達人間も例外ではなかった。

「ディメンション Dスキル」。

『∞・ENG』をエネルギー源に、人間を媒介とし、その人間のイメージした物に『∞・ENG』を出力する能力だ。
出力できる物は主に無機物だけで、大きさや規模はその人間の保有する『∞・ENG』の量や精神力などに影響する。

顕現できる物の大きさ、規模によってランクも付けられ、用途や複雑さも関係する。

全ての人間がそれ相応の『Dスキル』を使えるわけではなく、日用品しか顕現できない人もいれば、難しい物は創れるが簡単な物は創れない人もいる。

「……詩……。篠原…乃！聞こ……いる……か！篠原詩乃！聞こえて
いるのか！」

「え？は、はいつ、元気です！」

「お前なあ……」

『クスクス……』

教室中から笑いを必死に堪える声が漏れ出す。

耳の先まで真っ赤になり、俯きながら謝罪の一言を言って席に着いた。

「篠原、次同じことをやったら廊下じゃなくて職員室前で立ってろ。
次、答えろ」

「はい」

羞恥心のあまり、顔を伏せる以外、この今の現実から逃れる術を知らない自分が酷く悲しく思っただった。

「もう、いや……！」

「ほんとにもういや！」

イングラムM10の空になった弾倉を素早く新しい32連装弾倉セミオートに取り換え、側面部にあるセレクト・スイッチを半自動式フルオートから自動式に切り替える。

壁際から廊下の奥を覗こうとすれば集中的に攻撃され、壁が削られていく。

攻撃が止むのと同時に上半身を廊下に出し、適当に弾をばら撒く。敵は三人、バリケートの代わりに机で身を隠し、凌がれる。

今回の試合は隣の中学とだった。

詩乃が通う秋燈中学は市内の中では中ほどの実力者が多い学校だ。Dスキルについて本格的に学ぶのは中学以降。

小学校では基礎中の基礎のさらにその基礎。

Dウォーズに興味ある者、憧れる者達にとって小学校の授業は面白くない。

中学からはDウォーズの試合が可能となる。

詩乃もまた、Dウォーズ、Dスキルに魅せられた一人だった。

当然、Dウォーズに力を入れていて、尚且つ自分の実力に見合ったこの秋燈中学に来た。

アーガルは特に秋燈の中でもレベルの高いチームだ。

隣の中学秋燈とほぼ同レベルの学校。

実力では少しだけだが勝っていた。

膠着状態に陥ってから十分は経つ、そろそろ派手に動き出すはずだけ……。

時間を確認しようとした瞬間、的側から窓硝子が派手に碎け散る

音と共に激しい戦闘音が響く。

「きた……！」

身を潜めていた場所から滑り出て頭を低くしながら突貫する。

その先では後方の窓を突き破って奇襲を仕掛けた仲間達と敵が乱戦を繰り広げていた。

その渦中に向かって用意しておいた缶ジュース程の大きさの缶を投げ込む。

缶は放物線を描きながら飛んでいき、地面に達する寸前で破裂し、眩い光が周囲を包む。

「しまつ、スタングレネード!？」

「今だ、かかれ！」

リーダーの号令でアーガルのメンバーが一斉に襲いかかる。

結果は当然のものであった。

眼を潰され、視界を失った相手は反撃をする余地もなく瞬刻で片は付いた。

「勝者、秋燈中学、アーガル！」

勝利を告げるこの言葉にアーガルのメンバー達は大いに喜びを露わにした。

秋燈の敷地内には詩乃達のほかに周辺の中学の生徒やそうでない者達も集まっていた。

姿勢好はそれぞれバラバラで統一性はない。

だが解る事がある。

彼等は皆、周辺地域の『Dソルジャー』達ということだけ。

試合はDウォーズ協会を通じてネットで中継されるが、中にはこうしてわざわざ見に来る人もいる。

彼等も詩乃達もDスキルを駆使し戦う者達、同類、同胞、味方、敵、様々だ。

そんな者達を人は『Dソルジャー』と呼ぶようになった。

試合が終了するや否や、集まっていた人間はそれぞれに散って行った。

果たして彼等に詩乃達の試合が如何いったものだったのかは解らないが、こうして見に来ているということはそこその注目度があるということでもある。

中学に進み、試合を重ね、勝利することによって注目度が上がり、試合の数も増えていく。

「そんじやお疲れ。集まってくれて助かったぜ、詩乃！連勝記録更新だ！」

「ああそつだ。このまま突っ走って行こう！」

回りが影響されさらにテンションが上がるメンバー達を眺めつつ苦笑を零すが、ふと視界の隅に黒い影が映った。

視線を合わせようとするが、既にそこにはなにもなかった。

それぞれ帰宅の支度を終えて学校を出る。

「冷たっ！雨？やば、傘なんて持って来てないよ」

頬に落ちて来た雨の雫に驚き、空を見上げると梅雨の時期によく見る鉛色の雲が漂っていた。

小走りに駆け出すが、小降りの雨があつという間に大粒になり、激しい土砂降りに変わる。

鞆を傘代わりに家を目指すか、降る量はどんどん増えていくばか

りで近くの雨宿りのできそうな場所を捜す。

目に入った神社に避難し、空を見上げるが相変わらずの豪雨だった。

「はぁ……びしょびしょ。ちよつとだけ服干せないかな」

濡れた姿を見て、周りを見渡すが、雨宿りしてる境内の建物以外になにもない。

「ちよつとだけ入ってもいいよね？少し服を乾かすだけだし……平気、だよな？」

一人念を押してゆっくり中に入ると、薄暗く湿気臭い場所だった。それに雨が降っている所為で肌寒い。

肌に張り付いて気持ち悪くなった制服を脱ぎ、鞆に仕舞っていたタオルで体を拭いていく。

「下着までは濡れてなくてよかった。それにしても急に降り出すなんて……」

屋根を打つ雨音は弱くなるどころかどんどんその勢いを増していた。

「誰かいるのか？」

「っ！？」

突然室内の奥から男の声が聞こえ、反射的に自分の体を素早く手で隠し、振り返る。

だが、あるのは暗い闇で先までは運よく見えていなかった。

詩乃にとつては見られないで済んだが、同時に相手が誰かなのさえ分らない。

声の雰囲気からして同年代くらいの若い男の声だ。

詩乃はありったけの警戒の色を出して暗闇に話しかける。

「誰なの？」

「あー、途中で雨に降られちまって雨宿りしてる者だ。あんたもか？」

「そうよ、悪い？」

「いや、悪くないさ。それよりこっち来て話さないか？」

「無理、今人に見せられるような状態じゃないもの。それに襲う気？」

「なっ！？そういうことは先に言え！っ」か襲うか！悪かった、俺が悪かった。だったらこのままでいい」

暗くてよく分からないが、相手は詩乃の言葉に大分動揺しているようだった。

「ったく、それよりいつ止むか知らないか？」

「知るわけないでしょ。それよりほんとにこっちに来ないでね」

「大丈夫だ。動きたくても動けん。連れが眠っちまって手を離してくれないんだ。」

声には疲労と呆れが混じっているのが感じられるものだった。

詩乃は気付かぬ内に警戒を緩めていることに気付きはしなかった。

「ふーん、そうなんだ。あつ、そういえばなま——」

名前は？と聞こうとした瞬間、白い一筋の光が、雨が降りしきる暗雲の空に走り抜けた。

そしてすぐに雷独特の轟く音が鳴り響く。

「……………っ！」

「？おい、どうしたんだ、急に黙って……」

気に掛ける声が掛けられるが詩乃は自分の身体を抱きしめて蹲るだけだった。

「ほんとに……」

言葉が紡がれるところでまた雷が轟く。

詩乃は我知らずに床を蹴って声の元に跳び付いていた。

「お、おいっ！急にどう……………し、た……………もしかして、雷が苦手なのか？」

「……………う、うるさい。苦手とか苦手とかじゃなくて、その、ちょっと驚いただけというか……………何というか……」

「はいはい。分かったから、なんにも言わずにこうしておいてやる」

詩乃はこっそりと咄嗟に抱きついた相手の顔を見やると、暗がり

ではつきりとは分らないが、十代前半に見るまだどこか子供のよ
うな雰囲気を感じられるが、それでも大人びたところもある顔立ち。
髪は黒く、瞳も闇のような黒さがある。

相手からは詩乃の顔が見えていないのか、それとも何も言わない
のかは分らない。

ただ見えていないのは幸いだっただ。

もし見えていたのなら、この距離なら確実に今の格好を晒す羽目
になっていたからだ。

いや、接触してる時点ではれない方が難しい。

雷の恐怖で思考判断が鈍っているからこそその暴挙だろう。

現に男はやたらとはつきり伝わってくる詩乃の体温や触れてくる
肉体のラインやら何やらに内心ドキマギしていた。

それから無言の時間が一時間弱経った頃だった。

「お、雨が止み出してる」

「本当だ」

「なっ！？ばっ、バカ！今立ったらっ……！」

「へ？」

詩乃は立ち上がってから今の自分の姿を確認する。

制服は雨に濡れて乾かすのに脱いでいたのだ。

当然今の格好は下着のみ。

つまり――

「……不幸だ」

「……きゃあああああ――――！！！！！！」

暗い雲が去り、茜色に染まる空が顔を覗かせるそんな時、ある場所では少女の羞恥の悲鳴と一人の男子の哀れで理不尽な断末魔が高らかに響いたのだった。

これが綾瀬刹那あやせせつなと篠原詩乃しのはらのの邂逅だった。

後に詩乃の中学生生活を左右する出会いになることを彼女もその元凶となる刹那も知る由もない。

03・雨の中の邂逅 詩乃編その1（後書き）

どうも、後書きの書き始めを変えたいと思うunkonownです。
さっそく本音をプラスして変えてみました。

といってもこの回限定でしか使えないものですけどね。

とりあえずこちらも新年明けましておめでとうございます！

今回は詩乃との出会いを書いてみました。

それも短い長編です。

次か次の次くらいで次に移るくらいの♪

因みに雨の件とバイクは後のことでこの回のじゃないですよ。

それと文がちょっと最近安定しないんですよ。

一人称が書きやすいんですけど、三人称的なのも加えてるんですよ。
ね。

ですが、ここ最近書くのサボタージュ、つまりサボってたらどんな
ふうに書いて

たのかうまく掴めないんですよ。

困りました。

なので、これから変なところがあっても気にしないで見守ってください！

徐々に直していきますので！

それでは次回も宜しく願います！

04・雨の中の邂逅 詩乃編その2

で、結局しのりん、その人のことぶん殴って逃げちゃったと？」

「……うん」

グラウンドを走りながら篠原詩乃しのはらのは暗い表情で頷く。

前日の激しい雨が嘘のように晴れ渡ってしまった為に校庭は乾き、体育の授業で走っていた。

そしてその日に起こった出来事を彼女の最も心を許している親友、
いちのみやさな
一宮沙奈に相談していたのだった。
あのあと詩乃は力の限りを振り絞って文字通りぶん殴ってしまった。
た。

拳句の果てには気絶している間にその場を逃走ときたものだ。

沙奈は大きく溜め息を一つ吐き、呆れながら言う。

「それは絶対に謝った方がいいと思うよ。まあ会う機会があったら
だけど……」

「わかってるよ、それくらいは」

「で、件の相手が誰だか分かってるの？」

「し、知らない。でも同じくらいだと思うから、多分この近くの生徒
だと思う」

「んじゃあさ、次に会ったらメイドさんの格好でご奉仕してあげられ
ば！ご主人様、先日は大変失礼しました。そのお詫びとってはな
んですが、私の体を好きなだけ蹂り……なはぁーっ！」

「一体なに妄想の中の私に言わせる気！？てゆーかなんでメイドなのよ！」

「ぐへへへっ、だってメイドだよ、メイド！もしメイドさんにそんなこと言われたら萌え死ぬよ！それがしのりんがやったら尚更berry goodだよ！」

詩乃は一度自分のそんな姿を想像するも、すぐにその妄想を破棄する。

「おい、その二人。もつとしっかり走れー！」

体育教師が二人に気付き、注意を促す。

「「はい！」」

時は昼休み。

詩乃はいつも通り教室で沙奈と共に弁当の包みを広げていた。

「ん、そういえば試合勝ったんだってね。さすがはしのりんだよ！」

「え、ああうん。私だけの力じゃないよ。それに向こう、予定のメンバーの半分が欠席してていつものメンバーじゃなかったみたいだし」

「へえ、そうなんだ」

他愛無い話をしていると、ある会話が詩乃の耳に届いてきた。

「聞いたか、今度は豊富中の奴がやられたらしいぜ」

「マジかよ。これでDソルジャー連続襲撃事件は何件目だ？」

「もう六ヶ所以上は被害にあってるらしいぜ。犯人は顔隠してて特定できてねえし、酷い奴だと意識が戻ってない奴もいるらしいぞ」

詩乃はその会話を聞き、悲しい思いと怒りの気持ちが湧いてきていた。

Dソルジャー連続襲撃事件。

ここ最近巷を騒がせている事件だ。

どういう理由で犯人がDソルジャー達を襲っているのかはよく分かっていない。

ただ襲われているのは中学では名の知れた生徒達であつたりするということだけ。

警察のDスキル専門対策課が動いていることから犯人、もしくは達はDスキルを使って襲っているということだ。

そのことが詩乃にとっては辛かった。

Dスキルはその能力に大きな違いはあれ、誰でも扱える。

そしてそれを使った犯罪も増加している。

そういえば、昨日の相手も数人が欠席してたのもこれに関係が…

…？

？

「お前ら、最近噂のDソルジャー連続襲撃事件を起こしてるのはお前か……！」

「……………」

「あくまでも答える気はないか。……俺をそう簡単に潰せると思わないよ」

午前零時を過ぎ、夜の闇がより深まった商店街に煌めく白い何筋もの剣戟^{けんげき}。

飛び交う銃弾、弾き合う剣と剣のぶつかる甲高い不協和音が静まり返った街に鳴り響く。

襲撃犯が大きく地を蹴り、空中で回転を付けて剣を振り下ろす。

男は男はそれをその場で身体を捻り、紙一重で回避する。

そのまま回し蹴りを顔面に叩き込む。

襲撃犯はそのまま吹き飛ぶが踏み止まる。

「ちつ……………」

襲撃犯は軽く右手を挙げる。

「へっ、数で勝負しにきやがったか……………」

「やれ」

襲撃犯たちがその言葉で一斉に飛び掛かる。

「はあ……はあ……はあ……」

静まり返った商店街の一角の工事現場には複数の覆面を被った襲撃犯達が何かを囲むように立っていた。

そこには先程まで激しい戦闘を繰り返していた男がボロボロで倒れていた。

一人の襲撃犯が覆面を無造作に取り、荒い息を吐く。
その男の顔にはさっき蹴られてできた痣があった。

「完了だ。さっさとここから立ち——」

カラン、とアルミ製の缶が静寂を破り、音を立てながら転がっていた。

痣のある男は咄嗟に振り向けば、誰かが走り逃げていくところだった。

「しまった……！目撃者だ。顔を見られたかもしれない、捕えろ！」

——どうしよう……！どうしよう……！？伝えなきゃ……！詩乃に早く、伝えなきゃ！

少女は必死に暗い路地を走り抜け、大通りを目指しながらポケットから携帯を取り出し、電話を掛けようとする。

だが、走っている上に焦って指が上手く目的の番号を押せないでいた。

「お願いだから、指……！ちゃんとしな……さい、よね………」

少女の足は急激に止まり、崩れ落ちるように倒れた。

……詩、乃………気をつけ……てね。この男、は………勝つために………

少女の意識は覆面の男の一撃によって、深い闇の底に突き落とされたのだった。

その場にはただ虚しく、少女の手から滑り落ちた携帯の光が明滅するのみだった。

？

「やあ、やつと来たかい、綾瀬刹那。あやせせつな待ちくたびれたよ」

「待ちくたびれたも何も、学校に来てすぐに校内放送でいきなり呼び出されたんですけど」

尊大そんな態度で俺を呼び出したのは聖夜学園中等部生徒会長の桜井カノン会長だった。

いやまあ、尊大なのは態度や言動だけじゃなくて実際に凄いんだけさ。

いつものように遅刻ギリギリで校内に足を踏み入れた瞬間、それを見ていたのではないかというほどのナイスタイミングで呼び出さ

れたのだ。

兎に角そんなわけで俺は生徒会室にいた。

「ふふつ、それより何だい？その顔の湿布は」

「笑わないでください。ちよつと転んだだけです。それで、俺を呼び出したのは何かあつたんですか？」

「ああそうだ、さつき届いた紅茶あるんだ。淹れてくれ」

「はあ、分かりましたけど、まさかそのためだとは言いませんよね？」

会長は大きな机に肘を付き、顔の前で手を組んで言った。

「今朝方、霧ノ沢商店街の工事現場にて我が校の生徒が意識不明の状態で見えられた。病院に運ばれて検査したところ、命に別状はないが意識が戻るにはまだかかるそうだ」

紅茶をカップに注ぎ、それを会長の前に差し出す。

俺はその事件に心当たりがあることを思い出し、ぼつりとそのことを言った。

「Dソルジャー連続襲撃事件……」

会長は俺のその言葉を聞くと、口元をニヤリと歪ませて語り出す。

「Dソルジャー連続襲撃事件。この近辺の地域に出没し、Dウォーズ選手であるDソルジャーだけを狙っている連中だ。今回の一件で被害は我が校を入れて八件目。我々の前は隣地区の豊富中の奴が襲

われた」

「連中って……犯人はやっぱ複数か」

「ああ、外傷から明らかに複数で攻撃された痕がある」

会長はそこまで言うと、一度紅茶を一口飲んでから言葉を続ける。

「それともう一つ、興味深いことが解った」

「……………」

「調べてみたところ、襲撃された者達は皆、Dウォーズの試合に参加している者達ばかりだ」

「？そのどこが興味深いんですか。単なる偶然じゃ——」

「ないんだよ。人の話は最後まで聞くものだよ、綾瀬刹那。しかし確かに偶然という君の考えにも一理ある。だが、これを見たまえ。それは襲撃された者達のリストと彼等のスケジュールだ」

言い切る前に言葉を重ねてくる会長。

手渡された資料を見て俺は小さく愕然とする。

「そう、彼等は皆、秋燈^{あきとう}中学との試合を控えて襲撃されている。それも全員、そのチームでは中々の腕前達だ。ボクの言いたいことは分かるね？ボクの見立てが正しければ犯人は秋燈の人間の誰かだ。もしくは首謀者がいると考えている。だがこれはあくまで推測だがね」

目を閉じ、そう言う会長だが、自分の立てた仮説をそう簡単には言わない。

それを言う時は何かしらの確信があるか、情報を持っている時ぐらいだ。

会長は不確かな情報で先入観を与えないようにしている。

こき使われて知った会長の性格の片鱗だ。

「俺はどうしろと？」

「秋燈に試合を申し込んでおいた。あとは健闘を祈るよ」

「あの、会長。俺は困ってことですか？」

「それ以外になにか？ああ、それとこの携帯を預けておくよ。それは現場付近に落ちていたものだが、犯人の物と特定できていない。そっちで調べてくれたまえ」

「……はあ、会長に何言っても駄目なのは承知済みですから。わかりました。携帯はとりあえずとしてそれじゃメンバーは？」

「メンバーならこちらが用意した。試合に参加するメンバーの情報は綾瀬刹那、君だけしか流していない」

つまりは俺、襲われる可能性大ってことっすか！？

「当日になればわかるさ。それまでしっかり生きていることだ」

？

「荒川」

「はい」

「五十嵐」

「はい」

「返事はもつとしつかり言え。次、一宮……一宮！一宮沙奈！何だ、今日は休みか？なら次、卯花」

詩乃は何気なく空席の席を見つめる。

一宮沙奈の席だ。

めずらしいな、沙奈が休むなんて。

いつも元気ですこし五月蠅いあの沙奈が。

「おい、篠原、篠原詩乃！聞こえているのか！」

「へ？あ、はいっ！」

「まったく、またお前はぼーっとしておって……！次、田沼」

出席を取り終え、席に着いた詩乃はただ小さな疑問を持ちながらも気にしようとはしなかった。

空席の理由を――。

「あー、諸君。今日集まって貰ったのは言うまでもない。新たな試合相手が決まった。我々の記念すべき十連勝目の相手は彼の聖夜学園中等部だ」

「マジかよ……ここら辺じゃそこそこのレベルの高い奴が集まっているって」

「ああそうだ。だからこそ勝たなきゃいけない。これで勝てば俺達は今もうワンランク上の高見を狙える！」

場所は秋燈中学の使われていない会議室。

その部屋でアーガルのメンバー達が集まり、話し合っていた。

「そーいうわけで、皆、明日は頑張ってくれよ！詩乃、今回も期待してるぞー！」

「はい。それよりその顔の怪我、どうしたんですか？」

詩乃はリーダーの顔の痣を指差し、尋ねた。

集合してからというもの、それなりに気になっていたのだ。

「あ、ああこれか。昨日ちよつとぶつけてな」

視線を少し泳がせ、それからすぐに話題を別のに移す。

それからいつもの調子で作戦会議を続け、すぐに解散となった。
詩乃は商店街で買い物をして帰ろうと思ったところにリーダーみむろたつやと御室達也が駆け寄り言った。

「なあ詩乃。今日は一緒に帰らないか？」

「リーダー、どうしたんです？家は逆じゃ……」

「いやな、俺も買い出しがあつてな。それとそろそろそのリーダー
つてのもうやめてくれ」

「はあ、それじゃあ御室先輩」

二人は並んで夕焼けに染まる街を歩いていく。
はた傍から見れば恋人同士に見えなくもない。

詩乃は平静を装うが胸を打つ鼓動は早く、そんな自分の心境に戸
惑っていた。

異性とはあまり接点のないために緊張しているのだと自分に言い
聞かせる。

「なあ詩乃、お前は本当にすごい。Dスキルの扱いにしても戦闘に
関してもどれもすごいと思う」

突然隣を歩く御室は詩乃に向かってそんな賛辞を述べた。

詩乃は急のことに一瞬困惑するも、ぎこちなく感謝を言う。

「い、いえ、そんなことないですよ。それより今日はどうしたんで
すか？急に……」

「もう俺達、結構長いよな、チームを組んで」

そう言つと御室はいきなり詩乃の肩を掴み、壁に押し付ける。
衝撃で苦悶の声を出す詩乃を気にせず、御室は彼女の胸にその手をゆっくりと伸ばしてくる。

「せ、先輩……？ま、まって…一体何を？」

御室は答えず、手を伸ばすと同時にその唇に自らの唇を重ねようと近づいてくる。

そんな御室に戸惑い、困惑し、動けないでいる詩乃。

——何がどうして。嫌なのに動けない……！

そんな彼女の思いが通じたのか否か、顔があと数センチのところ
でポケットに仕舞っていた携帯が振動する。

彼女はそれを感じるや、すぐさま御室から離れ、携帯を取り出し、
素早く通話ボタンを押す。

相手は一宮沙奈からだった。

「も、もしもし！沙奈！？」

「あー、えーとだな、この携帯の持ち主は沙奈と言う人なのか？」

携帯の電話越しから聞こえて来たのは親友の沙奈の声ではなく、
若くどこかまだ幼さを残しているような男の声だった。

？

長から渡された携帯の持ち主を特定すべく、俺は一番上に登録されていた篠原詩乃という人物にコールした。

出たのはやはり少女でどこかその声には安堵の雰囲気があった。

俺の声を聞くや、一瞬警戒したのが電話越しでも分かるほど向この沈黙は大きかったが、すぐにそれは感じられなくなった。

話の末、事情を説明した俺はどちらからも近い中央公園で対面することになったのだった。

沙奈とかいう携帯の持ち主を勝手に想像しながら待つこと十分、待ち人は現れた。

「すみません、遅、く……………」

「あなたが、篠原詩乃さ、ん……………」

「……………」

「……………」

お互いに相手の顔を見て硬直する。

そう、つい最近この顔を見たんだ。

それにこの声にも憶えがある。

そして何故か急に頬が理不尽な痛みを思い出す。

「あの、どこかで会った事ありますか？」

ハモる声。

互いにどこかモヤモヤした気分で考えていると、ふと彼女がおかしなことを聞いてきた。

「あの、その怪我、もしかしくなくても殴られたものですね？」

「え？よくわか……」

俺はそこまで言つてある結論に辿り着く。

この理不尽な痛み、雨、雷、神社、スレンダーな少女の体が連想される。

そういえば結構良い身体つきを……んっ！そうか、あの時の！
どうやら彼女も俺の反応を見て確信したのか瞬間、いきなり頭を下げられた。

「ごめんなさいっ！あの時は気が動転してて……勢いで殴ってほんとにごめんなさい！」

当然女の子に公衆の面前で頭を下げれば許すしかない俺だった。
まあ公衆の面前でなくても許す。

彼女は気付いてないかもしれないが、あれは不可抗力で事故だったんだ。

それに少し涙目での上目遣いは反則だ……。

「別にいいよ。それより自己紹介がまだだ。俺の名前は刹那、綾瀬
刹那だ」

「私は篠原詩乃。詩乃でいいわ」

お互いがそれぞれ名乗り合ったところで俺は本題について彼女に話した。

「で、その沙奈、だっけ？今日は休みだったと。となるとやっぱり

アレに係わってるってことか」

「あの、アレって……？」

うーん、言っているのかどうか……いやまてよ？

詩乃は今回の事件の要の秋燈の生徒だ。

もしかしたら何か知っているかもしれないな。

「あー、まだ確かな証拠があるわけじゃないんだがな、沙奈って子、もしかしたら例の襲撃事件に関係してるかもしれないんだ。って言うても昨日襲撃された現場付近に落ちてただけなんだがな」

「で、でも彼女は戦闘Dスキルは使えませんよ……！どうやって――」

「待て待て！何も彼女が犯人って言うてるわけじゃないんだ。巻き込まれた可能性があるんだよ」

身を乗り出して迫る彼女を制止させ、何とか落ち着いて貰う。
気持ちには分かるさ、親友が事件に巻き込まれたと聞いて平静でいられる奴なんてそいつはよっぽど酷い奴か、友達じゃない最低野郎だ。

だけどそれ以上に詩乃を制止させた理由はその、な。
顔が近かったことなただけだね。

「それでだな、ここから先は重要な事だな。誰にも話さないって言えるか？」

「……はい。それでその重要な事って」

「確かな証拠があるわけじゃない。どうも犯人は秋燈の奴らしいんだ。商店街の防犯カメラに残ってた映像を出力してみたものなんだが……」

連絡する前に商店街に設置されていたカメラを全てチェックしてみたところ、一台だけ犯人の顔を捉えているものがあつたのだ。写真には男の後ろ姿が映っており、顔は左の横顔がちらっと見える程度のだが。

彼女にそれを見せると、一瞬、ほんとにほんの一瞬だったが、彼女が息を呑み、驚いているように見えた。

「心当たりはないか？」

「…う、ううん。ちょっとこれだと分かんないかな……」

「そうか。それじゃ、悪かったな、付き合わせて。この携帯は君が持ってたあげてくれ。それともしなにかあつたら連絡をくれるとありがたい」

自分の携帯番号の書かれたメモと彼女の親友の落とし物である携帯を渡し、公園の出口を目指して歩き出す。

「そんなはず…ない……そんな……」

彼女が背後で写真を見つめながら何かを小さく呟いたが、俺は特に気にも留めずに去った。

——この時、彼女の言葉に耳を傾け、その言葉の意味を聞き出していればもしかしたら、無駄な戦いをせずに済んだのかもしれない

い。

だが、ただの中学三年生の俺にそれを気に掛けることはなかった。
そしてその先にある未来を知ること……。

それを知っているのは存在しているかも知れない神だけ――

04・雨の中の邂逅 詩乃編その2（後書き）

お久しぶりです、unknownですよ。
どうも更新が遅くてホントにすみません。

理由は大いにあるんですけど、それ言つてると長くなりそうなので。
さて、私、別に連載してる小説の後書きにも書いたんですが、この
状況が三月近くまで続くかもしれないです。

最低でも二月の終わりまではこのペースだと思つてください。

つてか、このペースだと次話を投稿する頃には三月か！

ま、まあ、まだ更新は遅いという訳です。

この期間を乗り切れば更新が楽になるんですが……。

さて、本編について戻りますが、詩乃編、そろそろで終了します！

そして次は別のヒロインの物語に入る予定です！

因みにノベルとかでありがちな一番最初の表紙を飾ったヒロインが
メインとかの

ようなものはありません。

そもそも表紙がないけど……。

まあ簡単に言えば、最初に出て来たヒロインとくっ付くという訳で
はありませんから。

この物語はあくまで大多数で様々なヒロイン達に翻弄されるような
ものですから。

私自身、誰と誰がくっつくかなんて判りませんしね

今後とも私の勝手な思いつきで増えていくかも知れませんがよしな
に。

それではそろそろこの辺で。

また次回会いましょう！

PS・

更新が一番早いのは私が最初に書いている小説です。

理由は最初から考えていたものだからです。
すみません。

こちらにも出来る限りの早い投稿を心がけたいと思います！

お知らせ

まずは東日本大震災―（東北地方太平洋沖地震）に見舞われ、亡くなられた方々に哀悼の意を……。

日本観測史上最大、マグニチュード9.0を観測し、死者・行方不明者を尚増やし続けるこの災厄に心を深く傷つけられました。

この小説を読んで下さってる方々の中には東北出身者、もしくは友人や家族などがおられた方もいることと思います。

私の知り合いも少なからずいますが安否の確認は取れ、無事のとことでした。

私がこのような事を申すのはどうかと思いますが、不安に駆られ、辛い気持ちにある中、どうか気を落とさず、心を強く持つて下さい。暗い気持ちを出し続けていては周囲の人などを余計に不安にさせてしまいます。

そのようなことが無理なものも承知ですが、まずは自分のことを考えて下さい。

そして余裕が出来てから周囲へも眼を向けて下さい。

偉そうなことを言って申し訳ありませんが、自分まで倒れてしまつては話になりませんから。

本当にすみません。

これを読んで下さってる方へ、どうか節電を心掛けて下さい。

私はこのあいだ千二百円募金しました。

募金も出来ればしてあげて下さい。

この小説について

投稿はまた先送りになりそうです。

今回の地震で私のパソコンがダメになって、今まで書き溜めていた物が全部パーになってしまい、投稿にはもう少し掛るかと思っています。申し訳ありません。

また、この作品を大きく修正したく思います。

理由としてはアイディアが後から後から湧いて出てきて自分でも訳が分からなくなりつつあるからです。

ここにもう一度申し訳ありません。

完全修正の期間は決まっていますが、もう少し落ち着き次第取り掛かる予定です。

unknownより

P.S

その間として別作品を投稿させて頂くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7647p/>

Dウォーズ

2011年3月23日23時59分発行